

HOPES
ホープス セカンド
2nd

立派な梁や柱に思わず見られる、古民家の風情を生かした高倉さんの蕎麦店。店名は「なまえのないお店」です。「何だろうってちょっと考えるそんな時間がいいかなあと」。辰彦さんが名付けました。

昨秋、家をリフォームした後、「せっかくだから、この場所で蕎麦を出してみよう」と、夫婦で話し合ったのが始まり。「仕事をするのが好きなんで

恩返し蕎麦を味わって

高倉 辰彦さん
君枝さん (前田)



解体するのはしのびないとリフォームした自宅で、3月10日に蕎麦店を開業しました。間もなく避難していた伊達市の仮設住宅から帰村し、農業は二男の隆展さんが再開します。



銘木イチョウの一枚板のテーブルは、親戚の製材所からの贈り物。杉の丸太のイスには、カラフルな手編みの座布団が乗っています。「90代の地区のおばあちゃんが編んでくれました」

【なまえのないお店】
土曜 午前10時～午後2時
※臨時休業もあるので電話予約がおすすめです。
080 (5224) 7686

すね。避難中、ただいなのは苦痛でしたから」。蕎麦つゆ作りは君枝さん。開店祝いに振る舞った、おこわなどの手料理も大好評でした。一方、佐藤貞勝さん(前田)と辰彦さんが打つ蕎麦は、太めで歯ごたえがあり滋味深い味わい。2人は『北の清水蕎麦倶楽部』で蕎麦打ちを楽しんでいた仲間です。

震災直後は、孫を連れ、辰彦さんの妹が住む白河市に避難。家族で話し合いながら分散して避難を続け、現在は、就職や進学もあつて、8人家族が4か所に分かれています。「お彼岸に孫が来て蕎麦を食べ、おいしいと言ってくれましたよ」。2人の言葉には、家族や親戚、友人を大切に思う気持ちにじみまします。「これも恩返しの一つの方法かなと。復興の一助にもなればうれしいです」。

〈編集後記〉

涙もろくなってきたなと、思う今日この頃。卒業式での子ども達の姿に、目がウルウル。これまでの仮設校舎での学校生活が蘇りました。子ども達が笑い合う姿、友達や先生と学び合う姿。仮設校舎で過ごした日々、思い出は決して色あせない「ホンモノ」です。いつでも、いつまでも母校は飯館村の学校ですね。そして、今年の春、村の学校に子ども達の笑い声が戻ってきます。自分も保護者の仲間入り。楽しみです。(木幡)

●開園、開校—これから始まる新しい物語に今からドキドキです(自分が通う訳ではないのですが)。役場に近くなり、つついのぞきに行つてしまひそうです。修了!卒業した皆さんも、さまざま理由で転園・転校する皆さんも、一緒にバトンをつないでくれた園と学校。みんながここに繋がっていると感じます。離れた場所で新しい春を迎えた人も、それぞれの場所で、みんな頑張れ!(星)



飯館村は「日本で最も美しい村」連合に加盟しています。